現代中国都市部における産後の養生「坐月子（ズオユエズ）」

――近代と伝統の葛藤

安　姍姍

＜要旨＞

中国では、出産後の一定期間「坐月子（ズオユエズ）」という産後の養生期間が伝統的に設けられ、食べ物や行動のタブーが定められている。本論文では、中国山西省の都市部の褥婦 15 人に聞き取り調査を行い、女性達が「坐月子」の期間に経験する葛藤に焦点を当てた。その結果、次の 7 点が明らかとなった。

(1) 都市部では「坐月子」を過ごす場所は自宅や姑の家のこともあれば、家以外の施設（私立病院、産後養生ケアセンター）の場合もある。現在では、世話をするのは姑をはじめとする夫方の女性親族から、職業としての家政婦等のプロに移る傾向がある。

(2) 女性はさまざまな行動上の制約を課せられる「坐月子」に不満を持っているが、養生を中心とする中医（中国を中心とする東アジアで行われてきた伝統医学）の理論を完全に否定することができない。

(3)「坐月子」等の産後に段階的に行われる儀礼は、褥婦の身体の回復のためだけでなく、地位・役割の転換や家族関係の再調整をもたらす通過儀礼の特徴を備えている。

(4)「坐月子」においては、姑が褥婦の世話をするものとされていたが、女性達は実際には、実母や月嫂の援助を期待していた。

(5) 都市部の女性は、伝統に束縛される受け身の立場から、近代・科学の力を使い、身体管理を積極的、能動的に行う主体へと変化しつつある。

(6) 女性達は姑の世話を受ける伝統的な「坐月子」を好まないにもかかわらず、姑との関係を確立するために、家族、特に姑の意見に従っていた。

(7) 医療化された出産は女性達に伝統的な過ごし方ではなく、より近代的な過ごし方を選ばせるようになっている。

以上のことから、中国の都市部の女性達は、近代医学の力を借りて主体性を確立すると同時に、伝統的な「坐月子」を通じて家族関係を強化したいと考えていると言えよう。

キーワード：産後の養生，近代医学，中医学，主体性
AN Shanshan　奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程　shanshan_an@yahoo.co.jp

1　はじめに

中国社会の急激な近代化は妊娠・出産の形を大きく変えつつあり、妊娠と出産はほぼ完全に医学的な出来事になっている[1]。それに対して、産後は妊娠・出産ほどには医療化されていない分野と言える[2]。なぜなら母子の死亡率をできるだけ減らすことを大きな目標とする医学にとっては、赤ん坊が無事に生まれて母親が元気であれば、出産の目的はすでに達成されたことになるからだ［松岡 2011:282］。

ところで、中国社会では以前から妊娠・出産よりも産後の養生・摂生に関わる慣習や儀礼が多く見られる。たとえば、産後 1 ～ 2 ヶ月の間、産婦は家に籠り、安静と保温を厳重に守らなければならない。また、子どもが生まれて満 1 ヶ月になるとその家族は酒席を設け、親類や友人を招いて祝い、彼らから贈り物をもらう。このように、むしろ産後こそ女性にとって重要な意味があるとの考え方が見られる。その意味では、妊娠・出産は女性の身体の生理的な問題であるだけでなく、それぞれの社会や文化の伝統や習慣を色濃く反映するものと考えられる。だが、近年中国では産後においても、帝王切開による合併症や乳腺炎等の病名を付けられる機会が増え、さらにマタニティーブルーや産後うつ病等が問題になる等、医療化が進むようになっている。

本論文は、医療化された中国都市部の出産において、女性達の産後に焦点を当て、伝統的な過ごし方と近代医学がどのようにせめぎ合い、折り合いをつけているかを、産褥期の女性への聞き取り調査をもとに明らかにする。その際に文化人類学とジェンダーの視点から分析を行いたい。

2　この論文で扱う「現代中国」

中国が伝統型社会から現代型社会に移行する“社会転型”の過程については、2 つの説が唱えられている。1 つはアヘン戦争を起点とし、第一段階（1840 ～ 1949 年）、第二段階（1949 ～ 1978 年）、第三段階（1978 年以降）と時期区分し、さらに第三段階を“社会転型”の高速期とする説である。各転型段階の速度（スピード）、広度（範囲）、深度（深さ）、難度（難しさ）、向度（方向性）はそれぞれ異なる。現代化の完成まで約 200 年かかった欧米と比べれば、中国の現代化は始まりが遅かったにもかかわらず、スピードが極端に速く、短期間に圧縮されているとする。もう 1 つは 1978 年の改革開放以来、中国の社会構造は巨大な変化を遂げたとする説である。その見方では、1978 年以前の中国社会はまだ封鎖された状態であったが、改革開放を契機に、異なる特性を持ち始め、グローバル社会に急速に溶け込んだというものである。同時に、計画生育政策が実施され、一人っ子世代が誕生した。2 つの説を合わせてみると、1978 年以前の中国社会も確かに少しずつ

1 病院出産において「安全のため」に会陰切開はほぼ 100% に達し［姚 2008:1］、帝王切開率も 46.2% まで上昇した［Lumbiganon et al. 2010］。
2 医療化とは医療がその扱う範囲を広げ、日常生活のうち医療の対象となる部分を増やしていく現象である［黒田 1995：135］。

変化していたが、1978 年以降の中国における経済、社会、文化の変化はそれまでになく急速であったと言えよう［鄭 2003:63］。この激しい“社会転型”は必ず文化に反映され、伝統文化と近代文化、現代文化とそれ以降の文化、ローカルな文化とグローバルな文化の間の葛藤と融合、吸収と排斥をもたらすとされている［宋 2007:86］。つまり、1978 年以降、中国の文化及び中国人の考え方は、社会転型とともに大きな変化を遂げたと見ることができる。

21 世紀に入って以降は、2 番目の説を用いる学者がますます増えてきたため、本稿も 1978 年の改革開放を現代中国の始まりとしたい。この論文では扱うのは主に中国が改革開放を始めて 30 年以上経ち、市場経済が急速に進展するようになった時期である。従って、ここで述べる「坐月子」の言葉は、必ずしも現代中国以前の習慣としての伝統的な「坐月子」を意味しておらず、調査時点での協力者達が考える伝統的という意味であることを記しておきたい。

3　中国における産育習俗としての「坐月子」

「坐月子」は「猫月子」、「猫月」、「冲月」とも呼ばれ、出産後の一定期間、女性が体調を整え、赤ん坊に乳を飲ませ、子を育てるために行われる主に漢民族に見られる習俗である。「坐月子」を行う期間はその地の習俗や民族により、およそ 1 ヶ月、40 日、2 ヶ月、100 日に分けられる[3]。この期間、出産後の女性は家に籠るものとされ、生活上様々な「やってはいけないこと」が定められている。以下、本論文では山西省の習慣を中心に、産後 1 ヶ月の「坐月子」を扱う。

3-1 「坐月子」の起源と根拠

「坐月子」の習慣は 2000 年前の前漢（紀元前 206 ～ 8 年）まで遡ることができる。前漢に書かれた『礼記・内則』では「坐月子」を「月内」と呼び、出産前後の産婦の行動や儀礼等を記している。「坐月子」ということばは宋時代（960~1279 年）に初めて登場した。「坐」の文字が使われたのは、『婦人良方大全――坐月門』の中で、安産のために、その家族はあらかじめ吉凶を占い、よい方位を選び、そこに幕を張り、草席（畳あるいは麦や稲の柔らかいところ）の上に、布を敷いて寝床を作り、産婦はそこに入って草の上に上体を起こして座った姿勢で子どもを産むと述べられている。また、『古今医統大全』は産後の様子を以下のように述べている。「产毕未可上床、且扶住挺坐、却令人从心按至脐下者数次、余血皆下（産婦は分娩を終えてから、寝床に身を横たえてはならず、家族の手に支えられて、座る姿勢になる。そして、鬱血をすべて無くすため、心臓からへその下まで数回マッサージしてもらう）。」つまり、当時産婦は草の上に座り、分娩期、産褥期を過ごしたが、現代では座って産み、産後の養生生活をする女性はほとんどいないだろう。従って、「坐」の意味は現在では大きく変化したと言える。

3『簡明中外民俗辞典』2008 年版による。

中国の産後の過ごし方は、中医の「気」[4]「血」[5]「津液」[6]による養生が主流である［陳起燕等 2008；孫東波 2001；佚名 2013］。基本的に、産後は女性の体が弱るとされる。中医学的には、出産により母体は元気を損ない、「気」「血」「津液」が損傷されると、様々な汚れ、細菌が身体の中に侵入しやすくなり、体表の穴を塞ぐ。すると、気血がさらに不調になり、様々な病状（関節痛、腰痛等）を引き起こすとされる。そこで、「気」「血」「津液」を弱らせないため、褥婦は中医学に従い、産後の体調管理をきちんとしなければならないとされる。詳しく言えば、産後１ヶ月間に、褥婦は床をたたまず、授乳と食事どき以外は横になり、身体を休める。家事や労働等のすべての活動をやめ、基本的に姑が身の回りのことをする。また、風に絶対当たってはいけない。『古今医統大全』は、褥婦が寝起きする部屋には隙間があってはならず、隙間風が室内に入ると褥婦の身体に悪い影響を与えると述べている。寝床は壁の近くに置き、産婦に分厚い敷き布団とかけ布団を用いるのがよいと勧めている。さらに、絶対に水を触ってはいけない。家事はもちろん、入浴、洗髪、手洗い、歯磨きも禁止されている。これは冬、夏を問わず厳しく守らなければならない。もう１つ、食べ物を勝手に食べてはいけない。肉、魚等を食べ過ぎると、「血」「津液」がうまく流れなくなり、胃腸が弱まり、内部器官の障害になる。白いお粥のみを食べるのがよいとされる。最後に、家族以外の人は褥婦の部屋に入ってはならない。この場合の家族とは、褥婦の母、姑、夫に限られ、それ以外の人は父親を含めて１ヶ月後にはじめて褥婦の顔を見ることができる。家族以外の人が入ると、赤ん坊は外来の「気」を受けて、病気にかかるとされている。

医学的に言えば、褥婦達を感染しやすい外部環境から守る上で、「坐月子」は大きな役割を果たしていたと言える。そして以上のような慣習に従えば、母子ともに身体だけでなく、精神的にも十分な回復が望めるとされている。

3-2 「坐月子」の解釈

「坐月子」は、女性の身体や月経を穢れと見なす考え方とつながっている。漢民族では、分娩した女性の身体は不浄だと見なされ、赤ん坊の満月（1ヶ月に達すること）にならなければ、つまり新しい魂を神様（西王母、子送り観音菩薩等）から獲得するまでは、女性は籠った部屋から出てはいけないとされていた［黄正昕 2012；謝玉萍 2005］。

また、産後の生活は昔の女性にとってもう１つの重要な意味があった。この期間は儀礼によって新しい命の誕生を祝い、家での女性の地位を確立するための１ヶ月でもあった。中国では漢から清の時代までの婚姻は、一夫一妻多妾制の嫁入り婚である。女性は結婚す

4 身体の気は宇宙の気と捉えられ、それを体内に満たし、循環させ、身体を賦活する生命力とする。元気が旺盛なら下腹部に張りがあって、体内の臓腑・器官も力強く働くため、活気があって粘り強く、疾病にもかかりにくい。元気が衰えると、下腹部が軟弱となり、臓腑・器官も弱く障害を受けやすくなるので、活動も弱々しく、疲れやすく、冷えて、疾病にかかりやすい。

5 現代医学の血液に近いものであるが、同じではないことに注意が必要である。中医における血は全身の隅々にまで栄養分を送る役割を果たすほか、精神活動を支える物質とされ、血が不足すると、不眠、不安、健忘等の病状が表れるとされる。

6 体液と呼ばれ、体内各所を潤す作用を持つものである。「津」は陽性の水分であり、体表を潤おし、体温調節に関与し、汗や尿となって体外へ排泄されるものである。「液」は陰性の水分であり、骨や肺等の器官を潤おし、体内に流れるものである。

る前は父親、兄親に従い、結婚した後は夫に従い、年長者を尊び、尊卑の序によって秩序づけられていた。女性が権力や地位を確立するためには、男の子を出産する必要があった。杜芳琴は、伝統的に農業を中心とした儒教文化では、家父長制的な拡大家族が基本で、伝統的に強い「男児選好」と「多産」志向が見られると指摘している［杜芳琴 1994：152］。女の子より男の子が好まれる社会では、妾が男の子を産めば、その家族の継承者を産んだと見なされ、家族全員に喜ばれて、その女性及び子どもは大切に扱われた。特に産後 1 ヶ月の間に様々な儀礼が行われるにつれて、女性の地位は上昇し、確固としたものになる。有名な『詩経・斯干』編には、「男児を産めば寝台に寝かせ、裳を着せ、玉を持たせ、長すれば室家君王になせ。女児を産めば地面に寝かせ、粗末な服を着せ、瓦を待たせ、長すれば人に嫁して酒食の世話をさせよ」と謳われている［杜芳琴 1998］。つまり、「坐月子」の間に寝台に寝て、よい服を着て、玉を持っているならば、男の子が生まれたと判断されるのである。「坐月子」は、女性にとっては健康上の意味だけでなく、男の子を産んで高い地位に上昇し、権力を保持することになるのか、あるいは女の子を産んで低い地位のままに終わるのかを表すものでもあった。

しかし現代中国では、伝統的な「坐月子」には科学的な根拠がなく、西洋医学的には有害ですらあり、褥婦に悪い影響を与える等のことが言われるようになっている[7]。さらに、2013 年 7 月には、英国のケンブリッジ公爵夫人が出産後 24 時間以内に退院し、国民の前に姿を現し、宮殿へ戻る様子が放映された。1 ヶ月間家に籠らなければならない中国女性にとって、ケンブリッジ公爵夫人の例は、まるで西洋医学の科学性、先進性を証明するしるしであるかのように受け止められた。このようなことから現代中国では、女性がどのように産褥期間を過ごすのが科学的に望ましいのかについて、ますます話題にのぼるようになっている[8]。本論文では、文化人類学的な考察とジェンダー視点から、現代女性にとっての「坐月子」の意味を事例をもとに考察することとする。

4　調査概要

4-1　調査地域

本調査は、山西省（図 1 参照）の都市部にあたる 2 つの市――太原市（省都）と忻州市で行った。山西省は人口が 3629 万 8000 人（2013 年山西省統計局）で、主に漢民族が住んでいる地域である。山西省は経済的には沿海部ほど発達していないが、石炭の産地として全国の電力産業を支え、かつ中国四大仏教名山の 1 つの五台山があることから、伝統的文化や習慣が多く残っている地域とされている。

---

7 方舟子は、伝統的な過ごし方は陋習で、西洋医学と全く相容れないと述べる。月子風は身体の病気ではなく、心理的・精神的病気だと指摘している。

8 中国の新浪網、搜狐網、鳳凰網（インターネット関連サービスの提供を行う企業）等は 24 時間以内に退院したケンブリッジ公爵夫人のことを報道した。
http://blog.sina.com.cn/s/blog_4fbf5e6f0101aqp0.html?tj=2（2014 年 7 月 20 日閲覧）
http://news.ifeng.com/opinion/special/kaiteshengzi/（2014 年 7 月 20 日閲覧）
http://lady.163.com/13/0728/21/94TBOS1H00264M1V.html（2014 年 7 月 20 日閲覧）

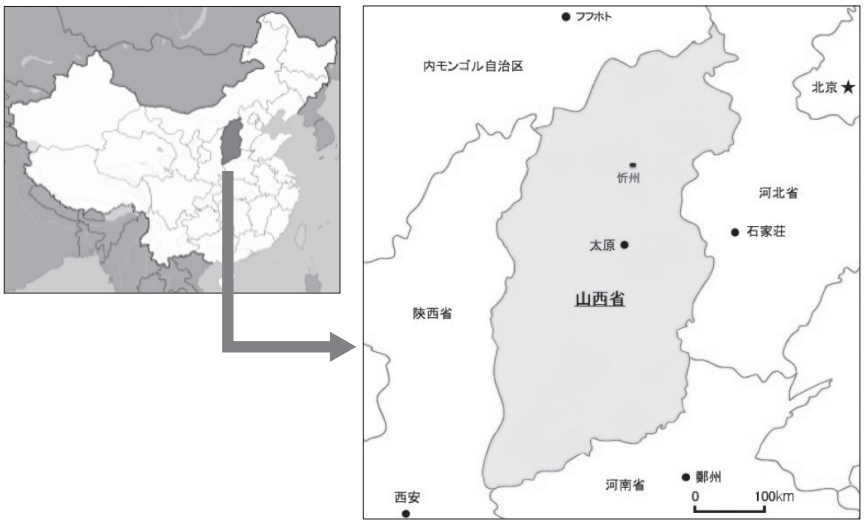

図１　調査地域
（Wikipedia 及び北京 ingにおける検索をもとに筆者作成。アクセス日：2014 年 7 月 20 日）

4-2　調査方法

太原市と忻州市に住む産後 2 週間から 2 ヶ月間の産褥婦 15 人に、聞き取り調査を 2 回に分けて行った。調査時期は 2012 年 8 月から 9 月にかけての 2 ヶ月と 2013 年 1 月である。調査対象者は、筆者が本調査以前に行った質問紙調査において、7 ヶ所の病院へ質問紙を配りに訪問した際に、面談の同意が得られた人達である。

2012 年 8 月から 9 月にかけては、褥婦 10 人に半構造化インタビュー（あらかじめ仮説を設定し、質問項目も決めておるが、会話の流れに応じ、質問の変更や追加をおこない、自由な反応を引き出す調査方法）を 2 回行った。1 回目の調査は、2012 年 8 月 17 日〜 8 月 23 日に被調査者の自宅で 1 人につき 1 時間〜 2 時間程度行った。2 回目の調査は、1 回目の面談のあと 2012 年 8 月 28 日〜 9 月 2 日に、1 回目と同じ 10 人に電話で 30 分〜 1 時間程度のインタビューを行った。内容はそれぞれの出産体験や産後の気分の変化等であった。

また、2013 年 1 月には太原市において、月嫂を雇った産褥婦 3 人と、月子センター（産後ケアセンター）に入った 1 人、及び私立病院の月子センターに入院した 1 人の計 5 人に、個別にインタビューを行った。この 5 人については、インタビューは 1 回のみである。月嫂とは、産後の世話を職業とする女性である。月嫂を雇う料金は 26 日間で 4800 元（約 8 万円）から 15800 元（約 26 万円）までと非常に幅がある[9]。月子センターとは、病院で出産した女性達に産後十分に回復させるために、産後のケアや食事、赤ん坊の世話をしてもらう宿泊型施設であり、現在中国では約 700 箇所あるとされる[10]。月子センターの

9　月嫂は母子のケアを 1 ヶ月間するとされているが、実際の勤務日数は 26 日間であり、休みが 4 日間である。

10　月子センターは 1970 年に台湾で設立され始め、その後、アメリカの華人地域に導入された。中国では 1999 年に北京で設立され始め、2003 年に上海にも建てられた［Cheung　2006］。設立に際して特に資格が要求されていなかったため、新たなビジネスとして展開されている面が強い。

入院費は1週間で3000元（約5万円）から10万元（約170万円）と高額なため、ここで聞き取りに答えてくれたのは中産階級の女性達といってよい。

聞き取りの内容は、いずれのインタビューにおいても、大きく分けると、(1) 妊娠・出産の状況や受けた処置、(2) 産褥期のケアの内容とその提供者、(3) 産後の気分の変化、夫婦・家族関係についてである。聞き取り方法については、録音の許可を得られなかった場合はノートにメモし、許可を得られた場合は録音した。

4-3　調査協力者の属性

表1は聞き取りした15人の女性のプロフィールである。表1のように、インタビューした15人はほとんどが都市部出身の女性で、農村部出身の人は3人しかいなかった[11]。15人とも初産であり、平均年齢は28.2歳だった。子どもの性別は、15人のうち7人は男児で8人は女児だった。学歴は11人が大学卒で、5人は大学院卒だった。分娩様式は、15人のうち9人は帝王切開で6人が麻酔せずに自然分娩だった。産後の養生については、12人は自宅で、1人は姑の家で過ごし、1人は私立病院に、1人は月子センターに入った。産後1ヶ月の間に褥婦の面倒を主にみた人については、10人が姑、3人が月嫂、3人は医療従事者であった。15人とも妊娠まで働いていたが、妊娠をきっかけに仕事をやめたのは4人、出産後育児休暇を4ヶ月とったのは8人、育児休暇を6ヶ月とったのは3人であった[12]。

5　調査結果

5-1　都市部における「坐月子」の実態

この節では、「坐月子」の過ごし方について3人の事例を取り上げ、現代女性が「坐月子」をどのように感じているのかについて探っていきたい。

Bさんの「坐月子」

私がBさんの家を訪ねたのは、Bさんの産褥18日目であった。私は安産お祝いを買うためにまずコンビニに寄り、褥婦のお見舞いだと店の人に話すと、赤いたまごの入った籠と12パック入りの牛乳を勧められた。私の訪問に対して、玄関のドアを開けてBさんのところに連れて行ってくれたのは、Bさんの夫であった。家にはBさん夫婦、赤ん坊、姑及び家政婦1人の5人がいた。2LDKの部屋であるが、Bさん以外の皆が全員リビングに座ってテレビを見ていたので、部屋が狭く見えた。8月であったが、Bさんは冬用のパ

11　中国の戸籍（中国語では一般に「戸口」）制度では、国民を「農業（農村）戸籍」と「非農業（都市）戸籍」に分けている。

12　一人っ子政策推進のため、「晩婚晩育」（初婚年齢が男性は満25歳以上、女性23歳以上、第一子を出産したときの妻の年齢が24歳以上）であれば、育児休暇が通常の98日からさらに30日加算される。これは夫婦どちらが取得してもよいことになっているが、実際には男性が育児休暇をとることは少なく、10日間の介護休暇として取ることが多い。さらに女性の場合、産後すぐに卵管結紮（避妊の目的で、女性の卵管を縛ってしまう方法）をすると、育児休暇を128日からさらに60日延長できる。妻が卵管結紮をした男性は、15日間の介護休暇を取得できる。

表１　調査協力者の属性表

名前	年齢(歳)	学歴	戸籍	分娩様式	勤務先	「坐月子」の場所	ケアの提供者	育児休暇
A さん	26	大学	都市	帝王切開	国家企業	自宅	姑	4 ヶ月
B さん	28	大学	都市	帝王切開	なし	自宅	姑、家政婦	なし
C さん	27	大学	都市	帝王切開	教師	自宅	姑	6 ヶ月
D さん	28	大学院	都市	帝王切開	銀行	自宅	姑	4 ヶ月
E さん	29	大学	農村	自然分娩	看護士[15]	自宅	姑	4 ヶ月
F さん	28	大学院	都市	帝王切開	教師	自宅	姑、実母	6 ヶ月
G さん	26	大学	農村	自然分娩	フリー	自宅	姑	なし
H さん	30	大学院	都市	帝王切開	欧米企業	自宅	姑	4 ヶ月
I さん	30	大学院	農村	自然分娩	民営企業	姑の家	姑	4 ヶ月
J さん	27	大学	都市	帝王切開	フリー	自宅	姑、実母	なし
K さん	28	大学	都市	自然分娩	国家企業	自宅	月嫂、実母	4 ヶ月
L さん	28	大学	都市	帝王切開	銀行	自宅	月嫂、姑	6 ヶ月
M さん	31	大学院	都市	自然分娩	国家企業	私立病院	医療従事者	4 ヶ月
N さん	28	大学	都市	自然分娩	国家企業	自宅	月嫂、姑	4 ヶ月
O さん	29	大学	都市	帝王切開	自営業	月子センター	医療従事者	なし

（筆者作成）

ジャマを着て、寝室で赤ん坊と一緒に横になっていた。クーラーや扇風機を一切使わず、窓も完全に閉められていた。私は蒸し暑いと思いながら、B さんへのインタビューを始めた。B さんが住んでいる新築マンションは彼女の両親が一括払いで買ってくれたもので、B さん夫婦は住宅ローン等を一切払わずに暮らしている。B さんは帝王切開だったので、産んでから 7 日目に退院した。出産の費用は約 5 万元（65 万円相当）で、夫婦の給料では無理なので、すべて B さんの親が支払ってくれた。夫は小さい会社に勤めていたが、子どもができてから育児費用を蓄えるために、B さんの父について道路建設のプロジェクトに携わるようになった。退院後 3 日間は、B さんはベッドから降りてはならず、家族以外の人がお見舞いに来ても B さんの部屋に入れなかった。4 日目から B さんは自由にベッドから降りられるようになった。この 1 ヶ月間、月子風（産褥期に悪い霊気が身体に入ることで、褥婦がかかる頭痛や腰痛や関節痛等の病気）にならないように、B さんは窓を閉め切り、空調や扇風機を使わず、密閉された部屋で暮らしている。そして、冷たいものを食べてはならず、冷たい水に触ることも、シャワーを浴びることもできない。食事は 1 日 5 食で、B さんは毎回少しだけ食べている。料理はあっさりしたものを中心とし、主に小米粥（アワを使ったお粥）やゆで卵や魚スープ等である。大米（白ご飯）をできるだけ食べないようにしている。

このような養生生活に対して、B さんは「普通の生活に早く戻りたい」と何回も涙ぐんで言った。姑からは、目が疲れてしまうので、テレビや PC を見てはいけないと言われ

ているが、B さんは姑の話を無視して相変わらず PC やスマホで遊んでいた。午後 3 時頃に、ちょうど B さんの 3 食目になった。家政婦が紅豆粥（小豆粥）を持ってきた。B さんはお腹が空いたよと言いながらゆっくり食べた。その後、家政婦が空茶碗を下げに来た。退院直後、B さんは姑に世話をしてもらっていたが、姑のことについて B さんは以下のように述べた。「妊娠中、姑とはごく普通の関係を持っていた。非常に仲がいいわけでも、仲が悪いわけでもなかった。本当に普通の関係だったと思うが、今は本当に変わってしまった。太原の習慣では、産後 1 ヶ月の間、姑さんに面倒をみてもらうことになっている。私の面倒をみるはずなのに、姑さんはご飯も作らなかったし、片付け、洗濯もしなかったし、何もせずに、毎日仕えられることを待っているかのようにぶらぶらしていた。結局、高いお金で家政婦を雇わなきゃいけないようになった。すごくむかつくわ。一緒に暮らすことは無理よ。それが、今のところ、一番いやなことだった。姑に帰ってもらいたい。姑がいると、手伝ってもらうというよりも迷惑だと思う」。

「そのことを姑に話しましたか」という私の質問に対し、B さんは「それは言ってはいけないでしょう。姑は年長者だし、これからも家族として長く付き合うので、私は不満があれば大体夫に言うよ、後はすべて夫に任せる」と述べた。私がインタビューを終えた頃に、赤ん坊が目を覚まして泣き始めた。B さんはすぐにパジャマのボタンをはずして、赤ん坊に母乳を飲ませ始めた。B さんの部屋を離れリビングに来た私は、その家族達と雑談した。姑は太原から 80 キロ離れた市に住んでいる。嫁の面倒をみるために太原に来たため、1 ヶ月になったら地元に帰る予定である。「坐月子」のことについて姑は以下のように述べた。「私の時代には何もなかったよ、卵や牛乳等の栄養品は贅沢な物だったから、食べたくても食べられなかった。その時は『糧票（食糧切符）』で食料品と交換するのだけれど、一家には限定された枚数しかないから、決して高いものを買ってはいけない。それで、姑が作ってくれたものを好き嫌いなし何でも食べたよ。そして、産後 1 週間後にベッドから降りて、簡単な家事をし始めたよ。それに対して、今の世代は幸せだと思いませんか。でも、幸せな一人っ子世代だからこそ、私はどのように面倒をみればいいのか分からないよ。できるだけ嫁の希望を満足するようにしたいけど、わがままな希望は許せないよ」。

赤ん坊が誕生してから 29 日目に、「満月（1 ヶ月になる）」という儀礼が行われる。その日に女性は初めて赤ん坊を連れて部屋の外に出て、家族全員で一緒に食事をすることになっている。昔は姑をはじめとする女性達は大量の料理を作って、お祝い客達にふるまったが、現在では、姑からもらったお金で大きなホテルを予約し、手間をかけずに食事するようになっている。この時には、赤ん坊が家族から様々なプレゼントをもらうのが常である。この地の民謡に「姑姑（父の姉妹）の靴、姨姨（母の姉妹）の靴下、妗子（父の兄弟の嫁）のズボン、婆婆（祖父母）の服」という歌詞があるが、これは親類が赤ん坊に贈るプレゼントについて謡ったものである。プレゼントの中には、絶対長命锁も含まれている[13]。「満月」を行った後、女性は普通の生活に戻れるようになり、その後 1 歳まで段階を追って儀

13 長命鎖は赤ん坊にかけさせる鎖の形の銀のネックレスで先に錠前がついている。首に鍵をかけて魔物の侵入を防ぐ、また現世に赤ん坊をつなぎとめるという意味がある。

礼が行われる。100 日目には「過百天」、1 歳には「過周歳（旧暦の誕生日）」が行われ、旧暦の春節を過ごすと「過虚歳」が行われる[14]。

L さんの「坐月子」

私が L さんの実家を訪ねた時、L さんはすでに産後 35 日目で、家には L さんと赤ん坊しかいなかった。夫は山東省で働いており、実母は買い物に出かけ、実父は会社に行っているとのことだった。L さん夫婦は山西省の出身だが、2 人とも山東省で働いており、今回は産褥期の 1 ヶ月を山東省で過ごしてから、L さんは山西省にある実家へ戻ったところであった。L さんは帝王切開で出産し、産後 7 日目に退院した。入院中、夫婦両方の両親がお見舞いに行き、姑以外の 3 人は L さんの退院時、病院から山東省の家まで送り届けて、様々な手続きを行い、その 3 日後に山西省に戻った。L さんは出産する前に、すでに友達の開いた派遣会社を通じて、5600 元（約 10 万円）で月嫂を 1 人雇っていた。その月嫂は褥婦の評判が大変よく、友達からも勧められた人である。入院中、月嫂は毎日 L さんと赤ん坊の様子を見に行き、赤ん坊を抱っこしながら L さんと話し、親しくなった。その後、月嫂は 26 日間 L さん夫婦と赤ん坊と一緒に暮らした。月嫂の仕事の大部分は、赤ん坊の面倒をみることと、育児方法を L さんに教えることである。月嫂は母乳を出すための料理を作り、乳房マッサージや授乳指導を行い、赤ん坊のすべての世話をする。具体的にはオムツ換え、ゲップ出し、赤ん坊の入浴、マッサージ、お臍の消毒等である。泊まり込みの 24 時間体制であり、赤ん坊の夜泣きにも対応してくれる。しかし、L さんと赤ん坊の服の洗濯はしないので、そのような家事をやるのは姑である。産後 1 ヶ月の間、月嫂がしてはいけないと言った禁止事項があったが、L さんはそれを守っていなかった。たとえば、彼女は産後 5 日目にシャワーを浴びたり、風を通すために窓を少し開けたりした。だが L さんは、夏用のパジャマに足をきちんと包むための厚手のソックスを履き、身体を冷やさないようにして、冷たい水には一切触れなかった。L さんは「伝統的な過ごし方は嫌だよ。1 ヶ月シャワーを浴びなかったり、着替えをしなかったりすると身体が臭くなると思いませんか。もっと科学的に過ごしたい」と述べた。また、月嫂は母子の世話をする以外に、現地の儀礼を熟知している。L さんは以下のように述べた。「私の月嫂は本当に優しい人だよ。産褥の 2 日目に近所の人にお粥を渡すという山東省の習俗を教えてくれた。教えてくれなかったら、近所の人に常識がない一家だと言われたでしょう」。26 日目に、月嫂は契約どおり仕事を終えた。「1 ヶ月の生活はどうでしたか」という問いに対して、L さんは「月嫂は赤ん坊のすべての世話をしてくれて、本当に助かった。姑にも感謝するわ。おむつや服を洗う等家事全般をやってくれて本当にありがたかった。お陰で、気持ちよく 1 ヶ月を過ごした」と答えた。

その後、L さんと姑は一緒に家事や育児を行い、35 日目の「搬満月」のときに赤ん坊は L さんの実家へ移った。L さんは姑と共に子どもを連れて山西省の実家に帰り、その

14 生まれた時点、基点となる最初の年を「1 歳」、「1 年」とし、以降元日（1 月 1 日）を迎えるごとにそれぞれ 1 歳、1 年ずつ加える。B さんの場合、出生時に 1 歳で翌年の 1 月 1 日に 2 歳となる。

後は実家で年末まで泊まる予定にしている。産後には様々な儀礼があるが、L さんは実家から遠い山東省（実家から 1060 キロ離れる）で働き、手伝ってくれる人もおらず、食事をする親類・友人も山東省にはいないため、「満月」を行わなかった。しかし、L さんは赤ん坊の 100 日目の「過百天」、1 歳の「過周歳（旧暦の誕生日）」等の儀礼は実家で行う予定である。

L さんをインタビューしている最中に、実母が外から買い物をして帰ってきた。L さんの実母は買ったものを台所に置いてから、赤ん坊を抱っこしながら私達の会話に加わった。「私の孫は可愛いでしょう、彼女に一番よい物を提供したいわ」。「私は娘の面倒をみたいけれど、習慣があるのでだめだよ。でも、娘は本当に優しい姑に出会ったと思う。姑はいい人だよ。娘によい養生生活を過ごせるように、お金も出してくれて月嫂を雇えたし、わがままな娘の面倒を必死にみてくれたから、本当に感謝するよ」と実母は述べた。

O さんの「坐月子」

私が O さんに面会したのは産後 2 ヶ月目であった。訪ねたところは O さんの実家であった。すでに自由に行動できる O さんは、月子センターのことを話してくれた。家には O さん、赤ん坊、実父母の 4 人がいた。夫は仕事のため帰っていなかった。O さんを含めた全員が 138 平方メートルもある広いリビングに座ってテレビを見ていた。赤ん坊はベビーベッドで寝ている。O さんは赤ん坊を親に預け、私をベッドルームまで連れていった。O さん夫婦は山西省の出身で、2 人とも北京でホテルを経営している。妊娠したことが分かってから、O さんは仕事をやめて姑の家に戻った。O さんは帝王切開だったため産後 7 日目に退院し、直後に月子センターに入った。O さんの姑も舅もまだ仕事をしているために、O さんの面倒をみる余裕がなく、家族全員で相談して、O さんは月子センターに入ることになったそうである。月子センターは O さんと赤ん坊の世話をすべてやってくれた。部屋が清潔でサービスがよよく、1 日 3 回の食事のほか、医師、助産士、催乳師（乳房をマッサージして母乳を出させ、乳房の痛みを緩和する職業である）、栄養士等のプロのケアを提供している。また身体の回復をはかるためのヨガ室、母親同士のコミュニケーションを取りやすくするための多機能ルーム、赤ん坊用のプール等の施設も整っている。母親と赤ん坊は別の部屋で休んでいるため、夜に赤ん坊が泣いても O さんへの影響はなかったそうだ。O さんにとって心配なことはまったくなかったように見える。費用は 1 ヶ月で 6 万元（約 100 万円）であった。しかし、O さんは次のように述べている。「伝統的な産後の養生をせず、姑にも迷惑をかけなくてよかったけれど、夜に皆が家に帰ったあと、だれもそばにいなくて寂しく感じた。そして、やっぱりここは家ではないので、見知らぬ環境で落ち着けなかった」「そんな時には、どうやって気分を紛らわせましたか」という問いに対し、O さんは「スマホで遊んだり、Facetime や Wechat（テレビ電話）をしたりしましたよ」と答えた。

月子センターを出てから 2 日目に、夫が家に帰ってくると同時に、家族そろってホテルで「満月」の儀礼を行った。赤ん坊は夫の両親から玉で作った腕輪を、O さんの両親から長命锁等をもらった。O さんの出身地の習俗によると、父の両親より母の両親から

もらったプレゼントが重視されている。長命锁以外には、男の子なら虎、女の子ならライオンのぬいぐるみ（ライオンは虎より強いと見なされているので、女の子がいじめられないようにという意味がある）や、花馍（北垣小麦とコンス達を主原料とし、水で練って、よくこねて、ハサミや櫛等を用いて精巧に成形し、蒸して着色をした食べ物）をもらうこともある。その後、姑の家で 10 日間泊まってから、実家に帰った。姑の家から実家まで帰った日に、「搬満月」という儀礼を行った。娘と息子を両方持っている年配の人に、赤ん坊を抱っこして外に連れ出してもらう。そして、その人が家から離れて最初に出会った人の父母が健在で、子どももいる人であれば、赤ん坊をその人に渡す。その人は赤ん坊を抱っこしてもう一度姑の家に戻ってから、赤ん坊を O さんに手渡す。その後、O さんは赤ん坊を抱っこして実家まで帰るのである。これは、赤ん坊が出会った人のように、幸せな生活を過ごせるようにという期待を込めて行われる儀礼と言える。実家に帰った後、O さんの実母は赤ん坊の髪の毛を剃るが、後頭部のやや上のところの毛を少し残しておく。

以上のように、B さん、L さん、O さんの事例を述べてきたが、インタビューを行った 15 人の事例から、都市部において産後の養生には 2 つのパターンが存在することが分かった。1 つは伝統的な過ごし方を守る女性達であり、もう 1 つは近代化・商品化された産後の養生をする女性達である。

表 2 のように、15 人のうち 10 人は家で伝統的な養生を行い、姑に面倒をみに来てもらったが、10 人とも不満を持ち、そのうち 9 人は姑との関係が悪くなった。それに対し、L さんをはじめとする 3 人は自宅で月嫂を雇い、家族には家事の手伝いに来てもらい、1 ヶ月を過ごした。3 人とも気分よく、楽しく過ごして、月嫂にも姑にも感謝することになった。M さんと O さんは、月子センターや私立病院という施設で医療従事者に面倒をみてもらっ

表 2　都市部における「坐月子」の実態

パータン	伝統的	近代的	
協力者	A、B、C、D、E、F、G、H、I、J	K、L、N	M、O
場所	自宅／姑の家	自宅	施設
過ごし方	●外出しなかった ●水に触らないようにした ●シャワーを浴びなかった ●空調を入れていなかった ●家事をしなかった ●基本的に横になって休んでいた	●外出しなかった ●空調を入れなかった ●家事をしなかった	●月子センターの外に出なかったが、院内を自由に動いた ●シャワーや水に触れた ●ヨガをした ●家事をしなかった
	パソコンやスマホで遊んでいた		
世話をする人	姑	月嫂・姑	医療従事者
気分	不満	満足	見知らぬ環境に不安
姑との関係	悪化した	感謝	普通
儀礼	満月、搬満月、過百天、過周歳、過虚歳等		

（筆者作成）

たため、姑との関係は悪くならなかったが、見知らぬ環境の中で不安に感じていた。

現在では、女性が産褥期を過ごす場所や、その世話をする人には変化が見られるようになっている。場所は自宅や姑の家のこともあれば、家以外の施設（私立病院、月子センター）の場合もあり、世話をするのは姑をはじめとする夫方の女性親族から、職業としての家政婦や月嫂等のプロに移る傾向があり、「坐月子」の様式は多様化してきている。とは言うものの、産後姑に面倒をみてもらう習慣はまだ根強く残っており、家政婦を雇ったBさんも、月嫂を雇ったLさんも、月子センターに入ったOさんも、姑の存在と無関係でいたわけではない。姑が嫁の面倒をきちんとみるかどうかは別として、漢民族では産後1ヶ月の間に姑が嫁のそばに行くか、あるいは嫁に自分のそばに来てもらわなければならないとされている。姑が来ない場合、姑のマナーが悪いとか、家族関係がよくないようだとか、嫁が家族に認められていないのではないかと周りの人に噂されることになる。さらに、里帰りは妻の家族成員に不運をもたらすため、やってはいけない習慣となる。現代社会においても、姑の存在感は大きい。しかし、褥婦は姑以外の男性家族、特に夫に産後の養生の世話をしてもらうことは、全く期待していないことが明らかとなった。

また、「坐月子」の忌みの中身にも変化が見られた。冷たいものや水に一切触れてはいけない、服を着たまま寝る、食べ物を勝手に食べてはいけない、目が疲れてはいけないという伝統的な習俗を、女性達はもはや守らなくなっている。たとえば、Lさんは産後5日目にシャワーを浴び、果物を自由に食べた。また15人ともテレビを見たり、PCやスマホで遊んだりしており、タブレットや携帯、ノートパソコン等の先進的なIT技術を使って産褥期を過ごす女性は増えてきているようだ。

だが、「坐月子」そのものを守らなかった人はいなかった。15人のうち10人は伝統的「坐月子」に従って過ごしたが、「坐月子」の行為規範には涙ぐむほど不満を持っていた。しかし、「坐月子をやめたいですか」という問いに対し、Bさんは「産褥期は一番病気にかかりやすい時期です。赤ん坊と私の将来のために、いくら嫌でも頑張って乗り越えようと思っています。伝統的なものはやっぱり理由があるからこそ残っているものでしょう」と答えた。一方、伝統的「坐月子」に従わなかった5人も、「坐月子」をする必要があると答えた。Lさんは自分の母親を例に出して、産後風に当たったために母がどれほど苦労したかを話してくれた。Oさんは「できるだけ早く回復して、北京へ戻りたいし、体重と身体の状態を妊娠前に戻すためには、坐月子は必要だよ」と述べていた。事例の3人以外に、Aさんは「私は帝王切開で産んだので、坐月子をきちんとしないと病気になりそう」と述べた。看護士であるEさんは「西洋医学では根拠がないけど、中医にはあるでしょう。われわれは東洋人で、西洋人の身体構造と違うよ」と述べ、Nさんは「お母さんや周りの年配者に勧められました」と述べ、Iさんは「先祖から残してくれたものだからこそ、それなりの理由があると思うよ。でも、もっと科学的なものになってほしい」と述べた[15]。このように、15人とも「坐月子」をする必要があると答えた。

15 看護士について、姚毅は『産科医・助産士・接生婆――近代中国における出産の近代化と国家化』の中で、「看護士」という言葉を使っているので、本論文もこの表記を用いる。

次に、L さんの例から月嫂の役割をみてみよう。月嫂は出産後の母子の世話をする専門の家政婦と定義されるが［楊麗 2011；張宏潔 2007］、L さんによれば、母親の世話が 20％、赤ん坊の世話が 80％を占めるそうである。月嫂は L さんの赤ん坊と同じ部屋に眠り、赤ん坊の入浴、着替え、おむつ交換、マッサージを行い、赤ん坊に 24 時間対応する。母親である L さんに対しては、哺乳指導と褥婦向けの食事の用意のみを行う。「月嫂は免許を持っていますか」という問いに対し、L さんは「友達に聞いたことがなかったので分からないが、訓練をうけたそうです」と言ってから、「月嫂には免許があるの」と私に聞いた。中国では法令に基づいた月嫂免許はまだ存在していないようであり［張宏潔 2007］、褥婦は免許の有無については気にせず、月嫂の育児経験、職業訓練、儀礼の知識、評判、コミュニケーション能力等に関心を持っていることが分かった。すべての月嫂が子どもの世話や褥婦への指導に加えて、儀礼を熟知し、周りの人々との信頼関係を築けるわけではないが、少なくとも評判のよい月嫂は、ただ子どもの世話と家事をするだけでなく、褥婦を精神的に支え、産褥期を取り巻く現地の文化に精通し、儀礼を上手に行うことができる人とされている。さらに、表 2 にあるように、産後儀礼は少なくないため、出身地以外の場所で働き、子どもを産んだ産婦にとっては、月嫂の存在は大きな意味を持っている。

最後に、O さんの例から月子センターの状況を見てみよう。B さんと L さんに比べて、O さんは現代的な「坐月子」を過ごした。月子センターは値段が高く、かなり裕福な家庭しか利用しない施設だと思われる。Cheung は、月子センターが人々の富を表すシンボルであると指摘している［Cheung 2006:200］。O さんの場合は伝統にとらわれず、また嫁姑関係に縛られることもなく、豪華なサービスを受けていた。サービスは充実しているが、O さんの事例を見る限り、「夜家族が家に帰ると寂しい」、「見知らぬ環境で落ち着かない」等の慣れない環境の中に精神的な寄り添いはなく、月子センターを利用したからといって必ずしも満足できるわけではないようだ。

5-2 「坐月子」をめぐる論争

この節では、伝統的な「坐月子」に対して女性達が何に問題を感じているのか、また嫁姑関係がなぜ悪化したのかについて、先行文献を踏まえ、15 名の調査協力者の例をもとに考察したい。

5-2-1　中医学と西洋医学

3-1 に述べたように、伝統的な過ごし方は中医学の「気」、「血」、「津液」による養生様式である。褥婦は産後の 1 ヶ月間そのような習俗をきちんと守らなければ、様々な後遺症が出るとされている。たとえば、頭痛、腰痛、関節痛等である［庄寿英等 2001；佚名 2013］。その一方で、医学雑誌や看護学雑誌は、伝統的な過ごし方は、現代の女性に悪い影響を与えると強く主張している。たとえば、遊彩玲らは福州市にある 2410 人の褥婦に訪問調査を行い、伝統的な過ごし方と褥婦の健康状態との関連性について調べた。その結果、シャワーを浴びない、洗髪しない、夏にも窓を閉めておくということによって、女性

は大量の汗をかくことになり、あせもがよくでき、皮膚炎や熱中症になりやすいと述べている。また果物を食べられないと、食物繊維が不足し、腸の動きが緩くなり、栄養バランスが崩れ、便秘等の病気になる可能性が高いとしている。2410 人のうち 1%の褥婦は、養生中に母子保健従事者の訪問を断った。そうなると、母子保健従事者は褥婦および赤ん坊の身体状況を把握できなくなる。以上のように、遊彩玲らは西洋医学に合わない過ごし方のマイナス面を取り上げたが、「坐月子」そのものをやめるほうがよいとは結論づけなかった［遊彩玲・何恵玲・呉懐真 2008］。

また Strand らは、山西省の農村部における高いくる病率と高い栄養不良率は、産後養生期に家に籠るという習俗と相関性があると述べている。この地域では、「坐月子」の伝統的習慣が強く残り、女性の教育程度が低いため、彼女らはくる病になった理由を理解できないでいると指摘されている［Strand, Perry, Guo, Zhao & Janes 2008］。

今回、15 人のうち 11 人は、それぞれ自分の「坐月子」に不満を持っていた。見知らぬ環境に不安を持っていた O さん以外の 10 人は、伝統的な過ごし方や嫁姑関係の不満を以下のように述べている。

> 「教育をうけた私達が坐月子に従わないといけないのはどうしてですか。」（D さん）
>
> 「1 ヶ月の間、肌が出るものを着てはダメ、食べるものはお粥だけ、出かけてはいけないし、窓も開けてはいけない、風がちょっと入ってもダメ。本当に嫌だ。家での坐月子に代わって、月子センターに入ればよかった。」（E さん）
>
> 「昔の習慣は生活レベル、医療技術と関係があるから、今のように科学が発達した生活で、そのような習慣を守るのは可笑しいでしょう。」（F さん）
>
> 「北京には月子センターがあるけど、山西省にはない。それで、家でしか 1 ヶ月籠るところがない。もっと科学的な月子センターを使いたいのに。」（H さん）

一方、「坐月子」に不満を表明しなかった K さん、L さんと N さんは、伝統的な過ごし方にそのまま従うのではなく、自分の体調や希望に応じて適当なものを選んで実行すればよく、科学的に過ごした方がよいと述べた。

> 「坐月子をしたくないわけではないけど、西洋医学による産褥ケアの長所と中医による坐月子の優れた点を併せるほうがいい。」（M さん）

以上のように、現代女性は多かれ少なかれ伝統的な過ごし方に不満を持っているが、年齢や学歴や留学経験の有無を問わず、全くやめたいと思っている人はいないことが分かった。彼女らは中医による伝統的な過ごし方には、中医なりの理由があるので、坐月子をする必要があると認識しているが、伝統的な過ごし方のすべてに従うのではなく、科学的に納得できる過ごし方をしたいと述べていた。西洋医学と異なる理論で成り立つ「坐月子」は、西洋医学の理論では説明できず、科学的な根拠があいまいとされるのに加えて、女性

達はメディアやインターネットを通してケンブリッジ公爵夫人をはじめとする欧米人が、産後 24 時間以内に自由に動くという情報を知り、伝統的な「坐月子」を疑うようになっている。その一方、女性達は治療や養生を中心とする中医の理論を完全に否定することもできない。「坐月子」をめぐる中医学と西洋医学との葛藤が現在表面化しているが、ここで注目したいのは、中医学と西洋医学のどちらが正しいかどうかではない。すでに述べたように、「坐月子」等の産後に段階的に行われる儀礼は、褥婦の身体の回復のためだけでなく、様々な文化的意味を持っている。西洋医学に属さない「坐月子」を敢えて西洋医学の理論で説明しようとすると、「坐月子」を妊娠・出産同様に医学の管轄下に置くことになる可能性もある。そうなれば「坐月子」に反映される家族関係、文化、秩序が無視される可能性もある。翁玲玲は、漢民族における「坐月子」は、産後の女性の身体の回復より身分転換及び社会関係の再構築等の文化的な役割を果たしていると指摘している［翁玲玲 2004：12］。そこで次に、「坐月子」を取り巻く家族関係を見てみよう。

5-2-2　世代間の対立

聞き取りした 15 人のうち、9 人は産後の 1 ヶ月の間に姑との関係が急速に悪くなったと述べた。褥婦と姑との関係を取り巻く急速な変化の理由を、褥婦及びその家族への聞き取りをもとに探ってみよう。

前文に述べたように、B さんは姑に大きな不満を持っている。実は、B さんは最初に姑にではなく、実母に来てもらいたいと考えていたが、実母に反対されたのである。「私は毎日仕事をしているので、面倒をみる余裕がないし、仕事が終わって、あなたの世話をする体力もない。それに、私が面倒をみに行ったら、周りの人にバカにされるよ。姑があなたの面倒をみるものよ」このように実母が述べて B さんを説得した。産後の 1 ヶ月の養生期間に、実母に援助してもらいたい若い女性は多かったが[16]、漢民族では姑に面倒をみてもらう習俗がある。B さんの実母も姑のやるべきことだと認識しており、B さんの姑もその覚悟をしている。そこで、退院した直後から、姑は B さんの家に来て、家事・育児をし、B さんの世話をすることになったのだ。

L さんも「私のお母さんは高血圧がある。疲れると倒れる可能性がある。私の面倒をみてくれる人について、家族で相談して姑にした。（中略）最初から月嫂を雇うつもりでした。プロにみてもらうのが一番安心できるから」と述べた。また N さんの話によると、「月嫂に来てもらうのは一番楽だから。姑は仕事をしているし、遠いところで住んでいるので、私の面倒をみることができない。実母は赤ん坊が泣いて起きるとその後なかなか眠れない性分なので、実母には週 3 回洗濯や家事をしに来てもらうことにした」とのことであった。さらに、I さんは「実家へ帰ると家族の男性に悪く影響するので、帰ってはいけない。実母は農村出身の人なので、昔からの習慣の威力を信じているので、姑の家で休養しなさいと言われた。でも、いくら姑は家族だと言っても、夫の関係で家族になっただけ

16　質問紙調査によると、産後の 1 ヶ月の間は実母の援助を期待すると述べた人が 118 人中 94 人いた。しかし、仕事復帰後は姑に子どもの世話をしてもらいたいと答えた女性が 118 人中 98 人であった。

で、実母ほど姑のことは詳しく知らない。初めての出産で知らない家族に世話されるなんて不自由だと思う」と述べた。さらに、D さんの実母は「産褥期に娘の面倒をみる人は姑でなければならない、赤ん坊は彼女の孫でしょう。姑に面倒をみてもらわなければ、私の娘が周りの人にバカされるよ」と述べた。

以上の例からみると、若い妊産婦は実母や月嫂の援助を期待しているのに対し、実母を含めた家族は姑に期待していることが分かった。つまり誰が褥婦の面倒をみるのが適切かをめぐって、世代間の対立が見られる。本来は里帰りが妻の男性家族に不運をもたらす穢れとして見なされ、すでに他人（夫）の家族に入った女性は他人の家族に面倒をみられるべきだとされている。今の中国においても、実母を含めた家族はその言説を信じている。今回の協力調査者の若い女性は一人っ子政策が実施されてからの最初の世代である。彼女らはきょうだいの多い親世代と比べて、親 2 人と祖父母 4 人の愛情を一身に受け育てられ、人と一緒に共同生活する経験がない。妊娠を契機に姑をはじめとする夫の家族との同居を始めることは、若い女性にとっては不自由な生活を始めるのに等しいと言えよう。そして「坐月子」の看護者の違いは、「坐月子」の中身の違いにも連動している。

G さんは次のように述べている。「退院してから、姑さんがうちへ来た。今から思い出してもなんと言えばいいの。いい人だけど、余計なことばかりしているわ。本当に姑の悪口を言いたくないけど、姑さんは頑固な人だから、私の話をまったく聞かない。コミュニケーションを取るのがとても大変だった。たとえば食事について、私は具の入ったお粥がいやだ。肉入りとか、野菜入りとか。姑さんが 1 回目作ったとき、私は我慢して食べた後、姑に具の入ったお粥は苦手だって言った。しかし、姑さんにあなたは甘やかされたお姫さまだね。何も入れないお粥は栄養がないわって言われた。それから、私の気持ちや反応を考えずに作り続けている。」

M さんは「ロシアで 7 年間の留学生活を過ごして、外来思想をたくさん吸収し、冷たいものを触ってはいけない等という伝統的な「坐月子」が好きではない。だから、病院で産んで、その病院の月子センターに入った。分娩・産褥は同じところでやると手間がかからずに済むし、医療従事者は私の状況を詳しく把握している。でも、実母にも姑にも反対された。彼女らは余計なお金がかかるとか、病院は病人が集まるところで私と赤ん坊によくない等の理由をたくさんあげた」と述べた。

L さんの場合は、姑に家事全般をしに来てもらった上で、産後ケアを月嫂に任せた。その月嫂から風に当たってはいけない、洗髪をしてはいけない等の禁止事項を言われたが、L さんはそのすべてではなく、冷えないように、水に触らないようにすることのみ心がけていた。

それに対し、姑の世代は以下のように述べている。

J さんの姑は「今の若者は甘いよ。本を読み過ぎるのかもしれない。なんでもかんでも西洋の方がもっと科学的だと話しているけど、実践の経験が浅いのよ。月子（産後養生期）をきちんとしないと老後になったら病気がどんどん出てくる。こういう話を何回も彼女らに言ったのに、全く無視された気がする。でも、年長者としての私は自分の嫁を放っておいて、見捨てるわけにはいかないでしょう」と述べた。

Eさんの姑は「その時代、生活レベルも経済もよくなかった、皆が畑仕事に忙しくて、面倒をみてくれる人もいないので、私は月子もきちんとやれなかった。なので、自分の嫁に同じ思いをさせたくないよ。できるだけ彼女に満足させたいと思っている。しかし、今の若者は「坐月子」の重要性があまり分からない。隣に住んでいる王さん（仮名）は赤ん坊を産んでから、好きなものばかり食べたが、ほら、見て、彼女は今腰も痛い、ひざも痛いって毎日言っているでしょう。もし彼女らの思い通りにやれば、また王さんと同じように苦しい目にあうかもしれない」と述べた。

Mさんの姑は「息子も嫁も長い留学生生活を過ごしていた。中国より外国の生活に慣れたような気がする。彼らの考えによると、月子センターにはプロがいっぱいいて環境がよいし、設備も整い、技術が発達していて、赤ん坊も褥婦もきちんと面倒をみてもらえそうなところだ。家族に面倒をみに来てもらっても月子センターのレベルに及ばないし、家族に手伝わせることもないので、月子センターに入るほうがいいとのことだ。どうぜ私は苦労してもよい評価をもらえない。最初からお金を出して嫁の思い通りに月子センターに送ることにした」と述べた。

以上の例からみると、現代社会では「坐月子」を取り巻く社会関係は依然として姑を中心とする女性ネットワークで成り立っていると言える。そして褥婦達の話には、夫である男性が登場しなかった。「坐月子」を取り巻く家族関係が現在の中国では、核家族の出現と増加によって、核家族が拡大家族の面倒をみる義務を免除されるようになる代わりに、拡大家族からの世話を受けることも少なくなったと指摘されている［中華生育文化導論2002：754］。従って、褥婦を取り巻く人間関係は、姑、姉妹、近隣の女性達から姑、実母へ、さらに職業的な家政婦や月嫂へと変わりつつある。だが、褥婦を援助する人が姑や実母や月嫂であっても、援助者は伝統的な過ごし方を唱えるという共通点を持っている。それは姑、実母、月嫂をはじめとする年配世代の産褥期への考え方を反映していると言える。また、年配世代は伝統的な過ごし方の正しさを説明できないものの、若い世代を説得するため、自分の経験から、身体に悪い影響があった例を持ち出している。その一方、近代的な教育を受け、インターネットで様々な情報を得る若い世代は、科学的な西洋医学を信じているものの、中医学による「坐月子」を完全に否定するわけではなく、自分の実情に合わせて適当なやり方で実践しようとしている。さらに、結婚しても親との別居生活をし続ける若い世代は、出産を機に夫の家族との同居生活を始め、「満月（1ヶ月になる）」を経て同居生活を終えるようになった。その結果、産褥婦の世代と伝統的観念を持っている年配世代は、産後の養生をめぐって葛藤・軋轢を生じることになるのである。

6　考察

6-1　通過儀礼としての「坐月子」

多くの漢族にとって、「坐月子」は妻（娘）と夫（息子）から母親と父親の地位に移行する通過儀礼として非常に重要である。アルノルト・ファン・ヘネップは、このようなある状態から別の状態に移行する際に行われる儀礼を通過儀礼と定義した［ファン・ヘネッ

プ 2012］。妊娠・分娩が医学の管轄下に置かれることで、儀礼的な側面は少なくなってきたが、「坐月子」においては、通過儀礼の特徴である分離儀礼、過渡儀礼、統合儀礼の特徴がはっきりと見られる。まず分離は、出産直後に風さえ通らない密閉した部屋への移動という形に表されている。その部屋に入った褥婦は、年配者に面倒をみてもらい、まるで子ども（娘）のように見えるが、同時に子どもに授乳をし、母親らしくふるまうという、娘か母親かどっちつかずの、中間的な存在となる。さらに、冷たいものに触ってはいけない等の行動や食事のタブーを課され、家に籠るのも過渡期の特徴と言える。家に 1 ヶ月間籠る理由について、翁玲玲は「産婦は出産をきっかけに、単純な妻の役割から抜け出たが、即座に母親という身分に移ることができない。それは母親という身分は、赤ん坊の誕生及び家族の承認があってはじめて存在できるものだ。そのような 2 つの条件がまだ確定できない状態下で、産婦はまだ何の身分をも持たないため、コミュニティや社会の一員となることができない」と述べている［翁玲玲 2004:13］。

統合儀礼は、「満月」及びその後に続く「搬満月」や「過周歳」等の儀礼と言える。つまり「坐月子」は、産褥期の女性が病気にならないように身体を休めるという医学的な意味だけではなく、新しい社会関係を作り、新しい役割を担うという文化的意味を持っている。松岡悦子は出産において「通過儀礼とは、まさに役割転換を起こさせる装置であり、個人と共同体が相まって人の社会的役割を変え、新たな役割を持つ人として生まれ変わるためのしくみである」と定義している［松岡 2014］。「坐月子」を通じて、姑を中心とする家族の秩序が再度確立されるとともに、女性と赤ん坊の家族内での地位と役割も承認される。つまり、女性は一人の娘や妻から子どもの母親になり、赤ん坊は所属の定まらない人から家族の一員になる。その意味で「坐月子」は女性を母親に転換させるための通過儀礼として、現在も機能していると言える。

6-2 「坐月子」を逃れたい理由 I ――「受動者」から「能動者」へ

聞き取り調査に答えてくれた女性達は伝統的な過ごし方に不満を持ち、「坐月子」を逃れたいと考えていた。しかし同時に、彼女らは「坐月子」をする必要があると考え、「坐月子」そのものを逃れたいわけではなかった。では、彼女らは「坐月子」の何から逃れたいと考えているのかを、ジェンダーの視点から見てみたい。

前述のように、彼女らは近代的ではない過ごし方から抜け出したいと考えていた。たとえば、1 ヶ月間洗髪やシャワーができないような過ごし方である。だが、風に当たってはいけない、冷たいものに触ってはいけない、重い家事労働をしてはいけない等のことは、女性達に受け入れられていた。すなわち、彼女らは決して伝統的な過ごし方を全面的に否定しているのではなく、近代社会に合う、科学的な過ごし方をしたいと考えているのである。姚毅は「技術と科学という 2 つの概念が、常に互いに置換できる関係になっていたからである。つまり、近代医学の経験知の蓄積である技術は、常に科学と置き換え可能とされ、イデオロギー化された概念となっているのである」と述べている［姚毅 2011:285］。それゆえ、近代医学ではない伝統的な過ごし方は常に「非科学的、非合理的」とされる。さらに、「親の時代には新鮮な果物や温かい風呂がなかったため、伝統的な過ごし方に従

わなければならなかった」「親の時代には限定されたものしかなかったでしょう」「伝統的な過ごし方はそれなりの理由があり、身体の回復によいと思うが、項目を自由に選択することは可能でしょう。何も考えずに従うのはおかしい」と調査協力者達が述べたように、科学的な過ごし方にはもう１つの意味が含まれる。それは束縛・規定された伝統からの脱出である。すなわち、若い女性はただ決められた伝統に従うより、自由に選択できる過ごし方をしたいと考えていることが分かった。

ここで、伝統という言葉は女性を束縛するという意味で、近代・科学という言葉は女性を解放する意味を示す。つまり、科学的な過ごし方とは、近代医学に基づいた科学という意味だけではなく、自分の体調やニーズに応じて内容を自由に選択できる産後の養生生活のことである。また、昔の「坐月子」は嫁の地位を高め、嫁を肉体労働から解放する役割を果たしていたとされる。確かに、肉体労働からの解放はかつて大きな意味を持ったであろう。しかし厳しい肉体労働がもはやなくなった現代社会では、伝統に従って養生することは女性にとってそれほど恩恵をもたらすものではなくなっている。また、今の世代は結婚しても親と別居し、産後養生を契機に姑との同居を始めるようになった。さらに、姑の指示に従って養生することは、伝統規範に従うことであり、自分の主体性を失うことでもある。つまり、女性達は近代的でないという理由をあげて、伝統的な過ごし方に抵抗し、受動者の位置から身体管理を積極的、能動的に行う者へと変わってきたように思われる。

また、伝統的過ごし方以外に、女性達は姑を中心とする産後ケアから抜け出したいと考えている。彼女らは決して世話をしてもらいたくないのではなく、姑の代わりに、実母や月嫂に面倒をみてもらいたいと考えている。親世代と若者世代は生活習慣や物事への考え方が違うため、姑に面倒をみてもらうことは、嫁にとっては様々な規範に拘束され、自由を失うことを意味している。その結果、女性はストレスをため、姑との関係を悪化させていた。それに対して、月嫂を雇った上で家族に来てもらったＫさん、Ｌさん、Ｎさんと、月子センターに入ったＯさん、及び私立病院に入院したＭさんは、姑との関係を悪化させることはなかった。なぜなら月嫂や月子センターとは契約関係であるため、彼らのアドバイスは強制力を持たず、家事のみをやってくれる姑に対しては、感謝の気持ちを持つことができたからである。楊麗は「月嫂は褥婦の身体回復によいだけでなく、精神的にも大きな支えになっている。月嫂は褥婦のストレスを緩和し、褥婦の産後うつ病になる可能性を解消し、減少させる面で大きな役割を果たしている」と述べている［楊麗 2007:2097］。かつての女性達は姑に面倒をみてもらい、家族の一員として認められてこそ、地位を上昇させることができたが、現代中国の都市部ではそのような必要性はなくなっている。女性達は、姑に支配される関係から離れて、姑との平等な関係を作り、自分の主体性を取り戻したいと考えている。月嫂や月子センターは、嫁姑関係の潤滑剤の役割を演じ、平等な関係の構築に役立つと考えられる。それは、産後養生のプロと呼ばれる月嫂や月子センターの力によって、プロではない嫁と姑との摩擦を減少させるからである。逆に、女性達は近代のしるしとも言えるプロの力を用いて、産褥期における行動や食事の自由度を高めていた。

つまり、都市部の女性は近代医学による産褥期を過ごしたいというよりも、むしろ伝統

的習慣に従うことに伴う上下関係から抜け出し、多くの選択肢の中から自分のニーズに合わせて自由に選べる状態を望んでいる。科学的な過ごし方を選択しプロの力を借りて、自分で選ぶ権利、自己決定の力を求めていると考えられる。

6-3 「坐月子」を逃れたい理由Ⅱ――医療化された出産の結果

現代社会に合う科学的な過ごし方をすることで、女性は主体性を確立しようと考える一方、近代医学の力で子どもを産んだ女性達は、産後も近代的な過ごし方をしたいと考えている。なぜなら、「女性達は（中略）出産を「自然な人生過程」と認識せずに、「医学的問題」と見なし、自分を「患者・病人」と見なし、医療行為に依存してこそ、健康な子どもを産める」と考えているからだ［安 2014:62］。

表 1 のように、聞き取りした 15 人のうち 9 人は帝王切開で出産し、自然分娩をした 6 人は全員会陰切開を受けていた。15 人とも剃毛、陣痛促進、人工破水をされており、医療介入を受けずに産んだ人は 1 人もいなかった。女性達は近代医学の力で無事に子どもを産んだために、産後も近代医学の力を利用しなければいけないと信じ、伝統的な過ごし方だけでは身体をよく回復させることができないと考えている。帝王切開をした O さんは以下のように述べた。「今は食品安全問題、大気汚染問題等様々な問題があるので、自然に産みにくくなっている。それで、皆（産婦）は子どもを無事に産めるように帝王切開を選んだよ」。「親の世代は健康問題が少ない時代だったから、自然に産んだら自然に養生すればいいと思うけれど、今はプロの人に面倒をみてもらわないと不安だ。特に自分の見えないところ。たとえば、手術を受けた内臓は自分の手で世話できないじゃない」また、自然分娩をした J さんは「抜糸しなくてもいい糸で会陰縫合をされたからよかったけど、下の世話はとても大変だと思う。シャワーを浴びてはいけないって年配の人に言われたけれど、浴びないと衛生的ではないでしょう。そもそも子どもを産んだら、汗をいっぱいかくし、シャワーを浴びずに厚いパジャマを着たままだと、身体の回復にさらに影響するでしょう」と述べた。つまり、女性達は妊娠から分娩にかけて医療行為に過剰に依存したため、以前よりも持つと養生の必要性を感じるようになっている。しかし伝統的な「坐月子」では不十分で、近代科学的な過ごし方でなければ、医療によって傷ついた身体を回復できないと考えている。都市部における女性達は、近代的象徴である医療行為に対する抵抗感がないからこそ、産後にも近代科学の力を信じ、近代的な養生を過ごしたいと思うにようになっている。その意味で、女性達は伝統的な過ごし方を逃れたいというよりも、医療化された出産の結果、産後の養生様式においても近代的な過ごし方を選ばなければならないと考えている。

6-4 伝統的なジェンダー規範の拘束力

中医学と西洋医学、世帯間の対立は表面化しているが、女性達は「坐月子」を通じて主体性を確立し、核家族を中心とする新しいネットワークを作りたいと考えている。「坐月子」の間に、女性は実母の援助を期待していたにもかかわらず、姑に来てもらい、伝統的な過ごし方を好まないにもかかわらず、家族、特に姑の意見に従っていたことから、中国

の彼女らは伝統的なジェンダー規範と自立意識や主体性との間で葛藤を抱えていたと言えよう。しかし、伝統的な規範は、血縁関係のない嫁・姑の家族関係を強化する働きをしている。中国では近代化とともに核家族が増え、住居形態は大きく変化し、かつてのように3、4世代が同居する形から夫婦・子どもを中心とする3、4人の核家族構成に変化している。女性は「坐月子」を含めた様々な儀礼によって、より大きな家族という共同体の一部分に取り込まれるのである。従って、産後1ヶ月間姑に面倒をみてもらうという習俗は、嫁・姑というこわれやすい家族関係を強化する意味があると言えよう。

また、計画生育政策により、女性は1人かせいぜい2人の子どもしか生まないため、出産、育児の経験については、多産世代の年配者に及ばない。そして伝承生活を重要視する中国社会においては、祖先伝来の生活様式に精通した年配者が尊重されると同時に、きょうだい間でも年齢の差による長幼の序が厳然と存在している［周潔 2003］。従って、若い女性は、年配者である姑の話に従い、産後の1ヶ月を通じて早く新しい家族に溶け込み、家族の関係を深めるように期待されていた。

7　おわりに

以上のように、中国都市部の女性達は、自分の意志で主体的に身体管理を行い、近代的自我を確立して、自由に選択できる産後の養生生活をしたいと考えている。しかし、若い女性は自由や自己決定を追求する一方で、夫方家族との関係を深めるために姑の意見に従い、伝統的規範から抜け出すことができないでいる。従って、女性達は近代医学の力を借りて主体性を確立したいと考えると同時に、伝統的な「坐月子」を通じて家族関係を強化したいと考えている。このように、世代や立場の異なる嫁・姑の間で伝統的規範と近代的考え方との葛藤や軋轢が生じている。本研究で指摘したように、若い女性の主体性は完全に発揮できるわけではなく、常に社会や文化の制約をうけている。その一方、若い女性の主体性の発揮に役立つ第三者として、プロの月嫂が登場した。女性達は月嫂を利用することで自らの伝統文化を選択的に捉え、伝統と近代をうまく接合し、主体性を確立したいと考えている。また、医療化された妊娠・出産は女性達に伝統的な過ごし方ではなく、より近代的な過ごし方を選ばせるようになっていると言える。

＜参照文献＞

安姍姍　2014 「中国都市部における医療化された出産の実態及び女性の自己決定――産後の女性の出産体験より」『奈良女子大学社会学論集』21：53-67。
黒田浩一郎　1995 『現代医療の社会学――日本の現状と課題』世界思想社。
近藤英俊・浮ヶ谷幸代編　2004 『現在医療の民族誌』明石書店。
田中雅一・中谷文美編 2005 『ジェンダーで学ぶ文化人類学』世界思想社。
ヘネップ、ファン　2012 『通過儀礼』綾部恒雄・綾部裕子訳、岩波書店。
松岡悦子　1991 『出産の文化人類学――儀礼と産婆』海鳴社。
松岡悦子・小浜正子編 2011 『世界の出産――儀礼から先端医療まで』勉誠出版。

松岡悦子　2014 『妊娠と出産の人類学――リプロダクションを問い直す』世界思想社。
安井眞奈美　2014 『出産の民俗学・文化人類学』勉誠出版。
姚毅　2008 「産科医・助産士・接生婆――近代中国における出産の近代化と国家化」東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻相関社会科学コース学院請求論文。
姚毅　2009 「産後の養生「坐月子」――中国」『アジア遊学』119：90-95。
姚毅　2011 『近代中国の出産と国家・社会――医師・助産士・接生婆』研文出版。
李小江　1998 「公共空間の創造――中国の助成研究運動にかかわる自己分析」『中国の女性学――平等幻想に挑む』秋山洋子・江上幸子・田畑佐和子・前山加奈子訳、勁草書房、pp.1-23

中国語
陳起燕・陳列平・Joanna Raven・張栄蓮・楊闽燕　2008 「産婦月子行為和伝統習慣及其影響因素」『中国婦幼保健』23：3744-3747。
関宏岩・戴耀華　2002 「坐月子対産後抑鬱症的影響」『中国婦幼保健』17：471-474。
郭麗君　2009 「生育的医学人類学研究――以某市職工医院婦産科為例」中山大学修士論文。
鄭杭生　2003 「社会転型論及び在中国的表現」『広西民族学院学報』25(5)：62-73。
宋吉玲　2007 「略論当代中国社会転型中的新文化構築」『江淮論壇』第 1 期：86-91。
厳振書　2011 「対中国社会転型期及段階性的認識与梳理」『社会科学管理与評論』第 3 期：80-84。
黄正昕　2012 「巴蜀漢族伝統育俗研究」四川師範大学中国少数民族言語文学修士論文。
銭永平・銭永琴　2007 「民俗学視野下的山西省晋中伝統生養習俗――以祁県為個案」『晋中学院学報』24(1)：75-79。
孫東波　2011 「個旧市区産婦坐月子的飲食習俗考究」『南寧職業技術学院学報』16(5)：11-13。
蘇海英　1997 「婆婆煮的“定心蛋”――三峡漢族婦女坐月子行為的人類学調査」『西南民族学院学報』01：59-64。
翁玲玲　2004 「従外人到自己人：通過儀礼的転換性意義」『広西民族学院学報』26(6)：10-17。
謝玉萍　2005 「金門伝統生育礼俗之探討」銘博大学修士論文。
遊彩萍・何恵玲・呉懐真 2008 「伝統“坐月子”習俗対産婦健康影響調査結果分析」『中国婦幼保健』8：1135-1135。
方舟　2014 「坐月子是種最具中国特色的伝統陋習」『健康管理』5：51-52。
周潔　2003 「中国華北の祖先崇拝――北京平谷県の意識調査を中心に」人間科学研究編『甲南女子大学大学院論集』創刊号：39-45。
楊麗　2011 「月嫂特徴対産婦健康影響的多因素分析」『Chinese Nursing Research』367：2096-2097。
楊敏毅　2008 「浅談科学坐月子」『全科護理』30：71。
章梅芳・劉兵・廬衛紅　2009 「“坐月子”的性別文化研究」『広西民族大学学報』31(6)：

51-60。
佚名　2013 「中国女人必須坐月子」『午後的幸福』10：56-57。
――　2013 「凱特王妃産後為何不坐月子」『経典閲読』p.56。
余静雲・楊玉娥・金継春 2010 「従多元角度看婦女作月子習俗」『長庚護理』21(4)：451-456。
潘貴玉　2002 『中華生育文化導論』 中国人口出版社。
朱芸　2010 「従治未病理論談中国特色坐月子」『遼寧中医薬大学学報』12(11)：97-98。

Cheung.N. F., M. Rosemanry, C. Linan, Y.C. Vivian, Q.Y. Xiu, P.Q. Hong & Y.Q. Jie　2006 'Zuoyuezi' after caesarean in China: an interview survey. *International Jounral of Nursing Studies* 43:192-202.
Lumbiganon, Pisake, M. Laopaiboon, A Metin Gülmezoglu, J. Souza, S. Taneepanichskul, P. Ruyan, D. Attygalle, N. Shrestha, R. Mori, N. Hinh, H. Bang, T. Rathavy, K. Chuyun, K. Cheang, M. Festin, V. Udomprasertgul, M. Germar, G. Yanqiu, M. Roy, G. Carroli, K. Ba-Thike, E. Filatova & J.Villar　2010　Method of Delivery and Pregnancy Outcomes in Asia: the WHO Global Survey on Maternal and Perinatal Health 2007-08. *The Lancer* 375:490-499.
Strand, M.A., J. Perry, J. Guo, J. Zhao & C. Janes　2009　Doing the month: Ricikets and Postpartum Convalescence in the Rural China. *Midwifery* 25(5):588-596.

インターネット資料
中国国学網（『礼記・内則』）
http://www.confucianism.com.cn/detail.asp?id=30456　2014 年 7 月 20 日閲覧。
中醫世家（『婦人良方大全』）
http://www.zysj.com.cn/lilunshuji/furendaquanliangfang/　2014 年 7 月 20 日閲覧。
中醫世家（『古今医統大全』）
http://www.zysj.com.cn/lilunshuji/gujinyitongdaquan/　2014 年 7 月 20 日閲覧。

‘Zuoyuezi’ Postpartum Resting Period in Urban China: Conflict between Modern and Tradition

Shanshan AN

Keywords: postpartum resting period, modern medicine, Chinese medicine, independence

In China, the postpartum resting period is called ‘zuoyuezi’, where a great range of taboos about food and behavior are prescribed. In this article I focus on internal conflicts experienced by 15 postpartum women dwelling in urban areas of Shanxi Province, after interviewing them about their experiences of zuoyuezi’. Based on this interviewing research the following seven points have been found.

(1) In urban areas the place for ‘zuoyuezi ‘ can be either a woman’s own house, her mother-in-law’s, or institutions such as private hospitals or 'yuezi-center'. Recently there is a shift away from the husband’s female relatives, such as the mother-in-law, to a professional woman, such as a housekeeper or yuesao, as carers during this resting period.

(2) Although most women are dissatisfied with their experiences of 'zuoyuezi', where they meet many constraints, they cannot completely deny the Theory of Chinese Medicine (TCM) centered on resting and curing for postpartum women.

(3) Rituals including 'zuoyuezi', which are held during various stages of the postpartum period, are not only done for the sake of physical recovery but are also seen as a rite of passage that functions to transform a postpartum woman’s role and social status and bring a readjustment of relationships within her extended family.

(4) Traditional norms of 'zuoyuezi'' assume that postpartum women will be looked after by their mother-in-law, but in fact, most women expect the assistance of a professional yuesao or their own mother.

(5) Urban women’s identities are shifting from that of passive acceptors of traditions to active agents who manage to control their own bodies.

(6) Despite the fact that most postpartum women dislike traditional confinement given by their mother-in-law, they obey family members’ opinions, especially those of the mother-in-law, in order to establish good relationships with them.

(7) Experience of modern medicine during pregnancy and birth makes women choose to have a modernized postpartum resting period.

To conclude, urban women in China try to establish confidence in themselves and independence from in-laws through knowledge of modern medicine, while at the same time they expect to establish good relationships with their in-laws by keeping the traditional 'zuoyuezi'.